

粘土による造形表現と身体表現の 融合についての一考察

曾 和 光 代

はじめに

神戸親和女子大学『児童教育学研究』第14号で「視覚と身体による表現の一考察」について記載した。その中でも述べたように視覚からの表現、コラージュを通して身体表現へともっていく。描きたいものがどのような描き方であれ画面の空間で生かされ、他の作品とつなぐことによりその空間を突きぬけて次から次へと広がっていく。これを身体表現にすると、一人の動きから、二人、三人と動きが移行し、舞台空間を突き破って表現されていくことが視覚表現を通して身体表現へと、もっていくことで理解できた。表現されるものはどんどん空間を突き破って移行していく。そうしなくては、作品は生かされず型のはまったものとなる。

最近のモダンダンスの創作作品の鑑賞をしていると感じるが、舞台においては、舞台の正面に空間は方向を定められ、観客に向きあうものと考えられていた考えはやぶられ、与えられた空間の中央だけが最も重要で興味の集中する中心であるという考えもやぶられている。表現する空間が広がって決まりがない。

表現したいものが型にはまらないで、自由に描かれている作品は感動を与えてくれる。

今回は視覚も含め、触覚も入れ立体的にとらえることのできる土粘土の素材を用いて、様々な表現の融合した世界を楽しみながら表現を捉える視点について実技を通して考えていき、感性を高めて自己を磨き上げていくことを目的として公開講座を平成9年11月10日神戸親和女子大学（以下本学と言う）体育館で実施した。

この講座は保育者のための講座であるが、シリーズになっており以下の講座

の内の一つであった。(題目のみとし、講師名は省略)

第1回目ーパネルディスカッション

「私の保育を語る」

ー保育場面における子どもの表現とその内的理解ー

特別講演

「子どもの表現と活動を読む」

ー子どもの内的世界を探るー

第2回目ー実技と講義

保育を創造するための実践講座(1)

「豊かな表現を引き出す活動と環境づくり」

第3回目ー実技と講義

保育を創造するための実践講座(2)

「感じた心を表現する」

ー保育者の感性を磨くー

第4回目ー講義

「演じて遊ぶ楽しさと自己表現」

講義

「子どもの表現を通してみる個の理解と援助」

以上4回シリーズで実施された。このシリーズのねらいは、「子どもの自己表現を豊かにする保育」を目指して、子どもの視点にたった個の理解と援助のあり方について、実践的に考えていき、講演や講義を聞くだけでなく、実際の保育実践においてどう捉えるかを受講者の方々と共に考え、これからの保育を創造していくためのアイデアづくりの場としていくことに目的がおかれた。

このシリーズの第3回目の担当者であった講座をもとに土粘土素材を通しての表現、さらに身体表現へとつなげていく過程を考察していきたい。

I 講座について

触覚を通して身体表現，土粘土という素材のおもしろさを充分に楽しんでいき，そこから湧きあがる自分の思いを体で表現してもらおうというものであるが，硬い土から柔らかい土へ練り上げていく感覚，柔らかく気持ちの良い感じなのに，重量感があるどっしりとした落ち着きを感じさせる。練り上げた一つの塊の土粘土はどの場所から見ても，重要であり，おもしろ味がある。空間を開くとどの空間もすべて同質の点で出きたものと見ていくことができる。表現していこうとするものを，どの角度から見てもそれが活かされている表現方法を自ら感じ取ってもらいたい。また土粘土は保育の中で子ども達にとって重要な教材である。自分自身の身近なところにある土をこねたり，泥んこにしたり，丸めたり無心になることができる。

なぜ，こんなに土の感触とほいいものなのか。地球上のすべての動植物は最終的には土に戻される。この世に人間が現れた時代から，人と土の関係は切り離せないものがある。土からの恵みは衣食住を満してくれている。土は人の心を安らげてくれる。土は情緒の安定の源でもあると考えられる。そんな土と，戯れ人間の源に返った気持ちになり，心から湧れる自然な表現を土へ，土から身体表現へと広げていき，保育者として心の領域を広げ童心に帰り遊んでいただこうというのがねらいである。遊べない保育者は童心にはもどれない。童心に戻れない保育者は子どもの心がよみとれない。保育者は，子ども達の気持ちを受け入れ，必要な配慮や援助のチャンスを見逃さずに子どもと共に生活する人であってほしい。又，子ども達が自発的に遊びにかかわっていかうとする保育は，その都度，子ども達と保育者の間で創造されていくものであり，これは決った型の保育にもとづいて保育するものでないということになる。保育者自身も従来の保育の壁を破って自から自己表現していくことである。そのためにも保育者自身も輝いてほしいものである。

今回は前回視覚表現を通して身体表現へと実技指導いただいた，宇都宮千佳氏と，本学教授美術担当の野口益代氏を講師として，以下の要項で実施した。

1) 保育を創造するための実践講座(2)－要項

1. テーマ：「感じた心を表現する」

－保育者の感性を磨く－

2. 目的：自分自身の身体を身近な素材を用いて、様々な表現の融合した世界を楽しみながら身体表現していき、表現を捉える視点について実技を通して考えていく。

3. 会場：神戸親和女子大学，体育館

4. 期 日：1997年平成9年11月10日（日）

10：00～12：00

5. 講 師：宇都宮千佳

アカデミー・オブ・パフォーミング・アーツ〔ミュージカル・ディレクター，振付家〕

本学教授 野口益代

本学教授 曾和光代

6. 対 象：幼稚園及び保育園等の現場の保育者の方々

実際の受講申し込み者86名

内訳20歳代24名

30歳代30名

40歳代24名

50歳代8名

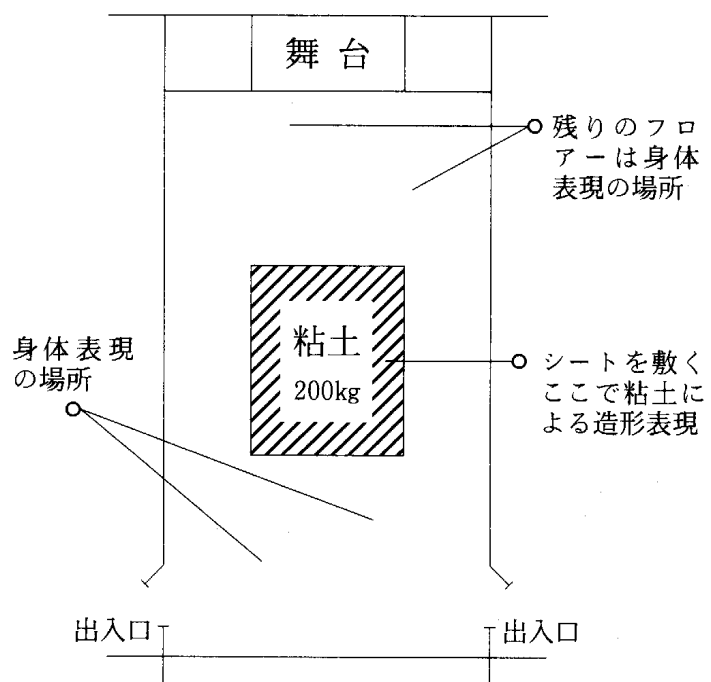
7. 使用教材：土粘土

200kg

8. 場所設定：体育館フロア

を図Iのよう
にする。

9. グループ分けをしておく。



図I 体育館フロア

2) 講座内容

指導過程

第一段階（土粘土の感触）

手で触ってみる。

自分のイメージをだすために目をとじて、土粘土をさわってみる。

①丸める。②引っぱる。③ち切る。④伸ばす。⑤巻きつける。等の動作を引きだす。

土粘土の量は好きなだけ粘土の山から取りだしてこねて使用する。

第二段階（土粘土の感触を思いだして）

手から身体各部へと動きを広げていく。

土粘土の感触を思いだして、粘土なしで、その感触を身体で動きへと変えていく。例えば、「冷たくて柔らかい」と感じたら、その感じを身体表現していく。「ズッシリと重い」と感じた者はその表現を身体で表わしていく。

第三段階（一、二段階を発展させる）

それぞれ一、二段階で大きな塊の粘土の中から取りだした各々の持っている粘土を元の大きな塊のある場所へ練り上げて元へ戻していく。身体表現としては第二段階の動きを進めていきながら、他の者との接点を求めながら、グループごとに集まり、相手に安心して体重を掛けながら皆んなで元の大きい塊の粘土のような形に身体で表現していく。このとき、それぞれのグループの中心者を決めておき集まっていく。一人の動き（大きな塊から取りだした粘土）から二、三人と集まっていく。（次から次へと練り上げながら戻って来る粘土）。最後にはどちらの表現も、ずっしりと重量感のあるものへとまとまっていく。

第三段階の過程の中で大きな塊の中から取りだした粘土が形を変えて元の塊へ戻っていく様子を粘土の感触を楽しみながら、身体表現していく。粘土そのものの表現活動と粘土を通して、その感触、様子を身体で表現していく活動を平行して実践していく。

II 講座の展開と受講者の活動

10:00 講師の方々の紹介

自己紹介を兼ねて外来講師宇都宮千佳氏にはクリエイティブなダンスを披露していただく。

10:30 第一段階

1) 身体をほぐすストレッチ体操をする。

2) 粘土の山よりそれぞれ好みの大きさの粘土を取り出す。(写真1)

粘土は体育館の中央に台を置きそこに山積みにしてあるので受講者は、各々好きな大きさの粘土を取り出して自分の粘土台に乗せる。

3) 粘土の感触を味わう。(写真2)

それぞれ取り出した粘土をこねたり、丸めたり、伸ばしたりして土の感触を味わう。幼い時に戻った気分になり粘土を無心にこねたり、丸めて

いる方、おしゃべりしながらこねる方、皆んな楽しみながら粘土は練り上げられていく。

アドバイスとして、子ども心のイメージとして何があるか。おだんご、おにぎり、雪だるま等を思いだしてもらおう。

個を中心に表現(一人)

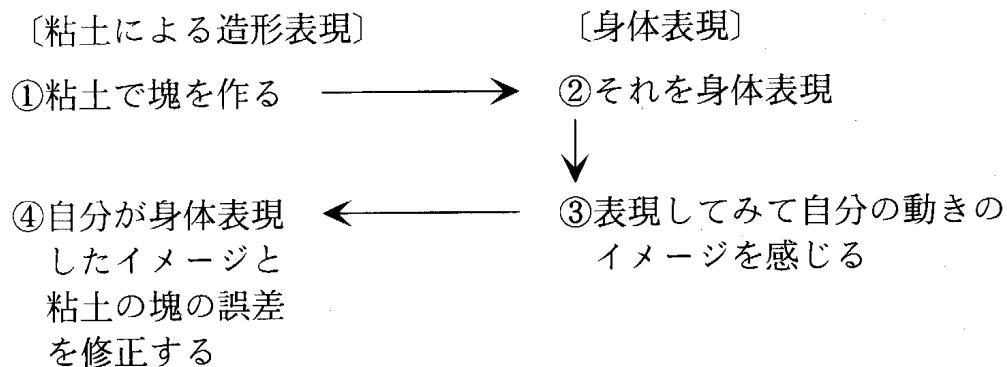
粘土で丸い塊がどんどん作られていく。



写真1 土粘土の山から好みの大きさの粘土をとり出す



写真2 土粘土の感触を味わう



10:50 第二段階

4) 粘土になって (写真3)

二人組になって、動きを粘土で身体で表現。よく練り上がった粘土を、さらに練りながら、色々な形に変化していく様子を感じたまま動いていく。一人が粘土をこねて形をどんどん変えていく。もう一人はその様子を粘土になって、その表現を身体で表していく。粘土が激しく練られていくと動きも激しく床にたたきつけられたり、ほうりだされたりする粘土もあり、それぞれの組の表現がだんだんと活発になっていく。動きは左右上下と激しく変化し、粘土に対する自分の思いを粘土の変化に合わせて自由に表現されていった。

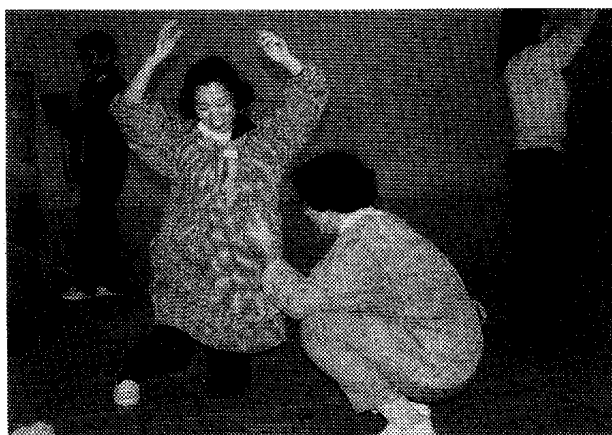
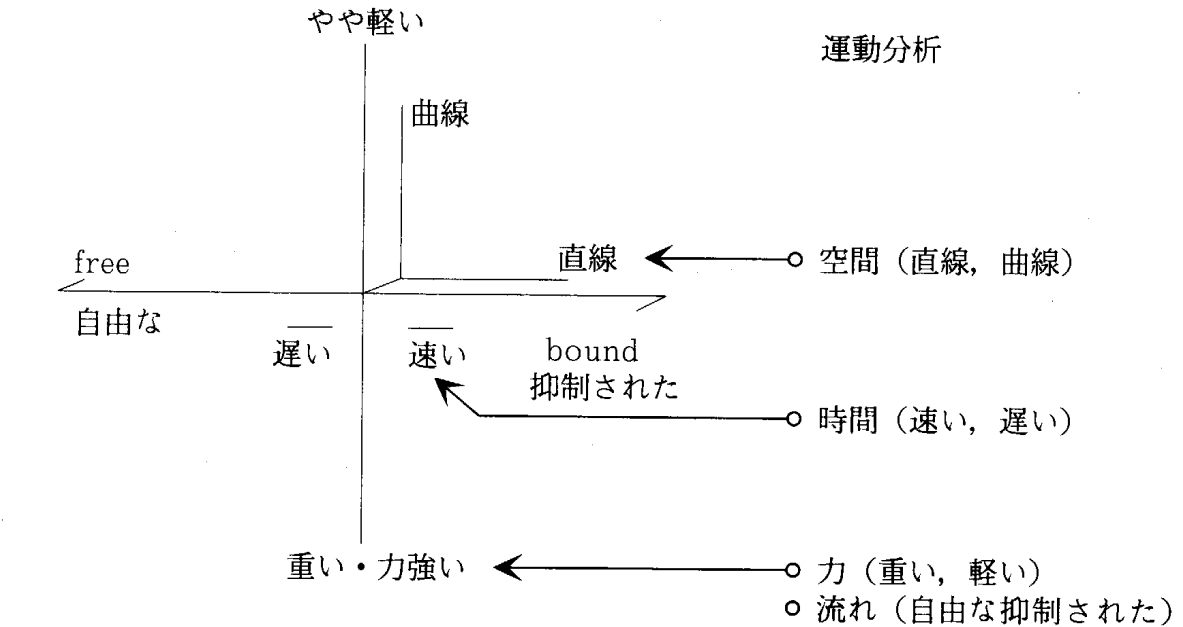


写真3 粘土の変化に合わせて動く

5) 動きのアドバイスを受けて

今までの動いた動きを宇都宮講師が運動分析をする。(図Ⅱ) (写真4)



図Ⅱ エフォートグラフ

図Ⅱを説明しながら、ここで空間、時間、力、流れの関係を学習していく。空間を直線的に移動するのと曲線を描いて進む動きがある。時間においては速い、遅いの動作、進行の運動。力においてはやさしく軽い表現に対し重く力強い表現のしかたがある。流れとしては自由な動き、抑制された動きがある。これらの要素は対比されており、動きのイメージを広げ動きの変化をだすのに必要な表現の要素であり運動の基本である。

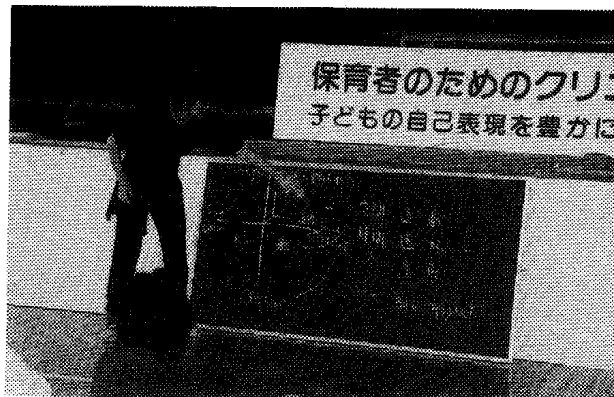


写真4 運動分析の説明

6) 全員で粘土になって (写真5)

運動分析の説明を受けた後に再び身体表現へと進めていく。今度は宇都宮講師のこねられる粘土の変化に合わせて全員で粘土の動きに合わせて自分のイメージで身体表現していく。同じ形の粘土であっても表現者のイメージや見る角度が違ってくると表現方法も変わってくる。(写真6) それぞれの動きは異なってくるが、全体を見ていると一つのまとまりを持って動き表現されているように感じた。

7) 接点をもとめて

一つの塊が2個、3個とよりふくらんでいく。(複数)
(写真7)

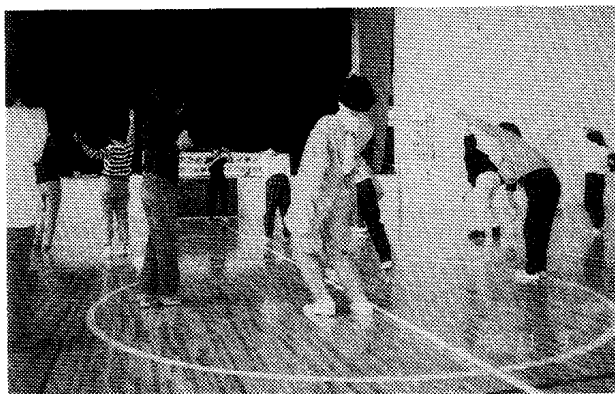


写真5 全員で粘土になって



写真6 粘土の変化をとらえるイメージが違う

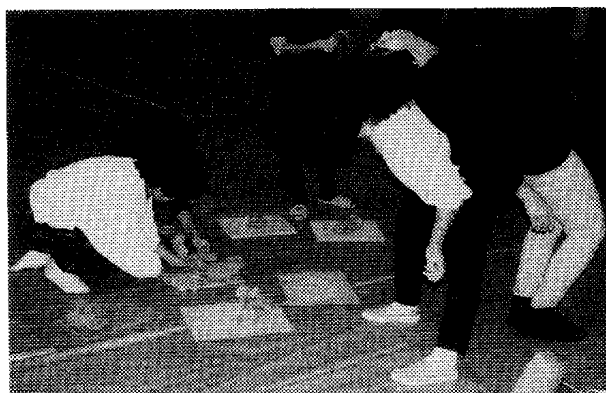


写真7 接点を求めて他とひっついていく

〔粘土による造形表現〕

②粘土の方も動きのイメージを考えて、ひっつける。

③粘土で表現されたイメージを持つ。

⑥それを粘土で表現していく。
(写真7)

〔身体表現〕

①一人の動きからさらに発展させて、他の一人に近づけて接点を持つ。

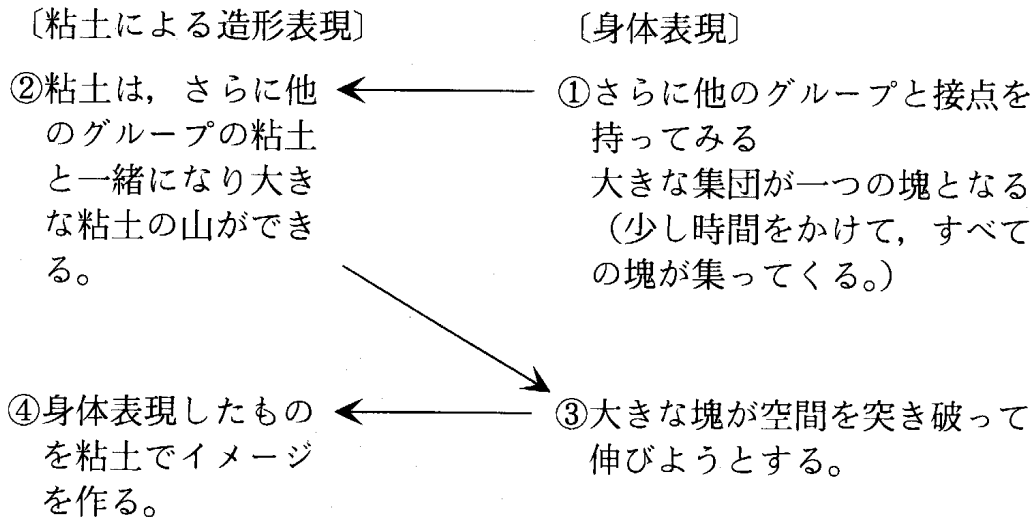
④さらにそれを身体表現へと、もっていく。

⑤少し大きくなった塊は少しずつ空間を破って伸びていこうとする。

11 : 15 第三段階

8) 大きな塊へ

個が接点を求めて増え大きな塊へと発展していく。



粘土は初めの塊の山から少し形を変えて元の空間へおさまり、受講者の方々はそれぞれ自然な動きで個の動きから群舞となり一点へ引き寄せられ大きな群れとなる。その群から又、その空間を突きぬけようとする個が表われ全体でポーズが決まる。

粘土表現に身体表現を融合させると普段考えつかない動きが自然に身体で表現することができており、身体表現の域が広がっていった。

9) 自分自身の身体表現を粘土におさめて

最後に、今まで自分自身が動いてみて自分の一番ひかれるポーズを身体表現しそれを粘土で造形表現した各々の作品を舞台に並べて動きのある造形作品を鑑賞した。

Ⅲ 土粘土による造形表現を身体表現と融合させた結果の考察

受講者の方々の意見や感想を元に土粘土による造形表現を身体表現と融合させて受講者自身どのように表現に対する考え方や思いが変わっていったか考察していく。

1. 土粘土にさわってみて

1) 手の感触

—さわってみて感じることは—

- 手になじむあたたかさがある。
- 手にやさしい。
- こねていると手の平から伝わってくるやさしさは赤ちゃんに触れているようである。
- 柔らかい感じがする。
- 手にまとわり付く感じで気持ち良い。
- 冷たく気持ちよい。
- 石のような冷たさではない。
- 冷たく柔らかい。
- ずっしりと重い。
- 手にベタベタしない。

2) 目からの感想

- 独特の動きがおもしろい。
- さわったり、かかわっていくとどンドン形が変化していく。
- 柔らかくて形が変わっていく。
- 伸ばせば伸びる、ねじればねじれる。

3) 鼻からの感想

- 油粘土のようなくささがない。
- 土の臭いは自然で良い。くさくない。

以上が触覚，視覚，臭覚から感じとられた意見や感想であった。これらは土粘土の特性であり，他の粘土にない特徴を持っている。これらの特性から心の

変化を感じて次の感想がでてきた。

- 人を包み込むような何んでも受容してくれそうな包容力がある気がする。
- 心がなごみおち着く。
- 気持ちがおち着きリラックスできる。
- おもしろく心がおち着く。
- 心が解放される。
- 安心感の様な物がえられる。
- 心地よい気分になる。
- 頭がクリアーになった。
- 素朴でなつかしく思う。
- 粘土に愛着がわく。
- 心まで粘土と一緒に動き変化していくように思う。
- 自分自身も粘土になったよう。
- 自由に変化していくのでいつまでもさわっていたい。
- 時間があればずっとさわっていたい。
- 子どもの頃の感覚がもどってきた。
- 子どもが粘土が好きなのがわかる。

これらの感想も土粘土の特性が表われている。

冷たい感触の中に暖かく柔らかい感触も持っている。重たくずっしりした感じなのに、こねていると自由に形を変えていけるおもしろさがあり、こね手の思いのままになる可塑性を持っている。それが、人の心を包み込むように心をなごませてくれる。解放的にもなり安心感を与えてくれる。いやな臭いもなく、いつまでもさわっていたくなる。飽きることがない。

土と人間に限らず、土からの恵みで育っている地球上の生物の自然なかかわりである。その自然なかかわりが気持ちをおち着かせてくれると考えられる。心をリフレッシュさせ生きる力を与えてくれる。最終的には人も土に戻されるのである。

これらの特性を持った土粘土はぜひこれから発育発達していく子ども達には、

なくてはならない教材の一つである。受講者の感想にもあったが、何どもやりなおしがきくことが安心感になり、子どもにとって再度挑戦するチャンスを持つことになる。完ぺきに作られている玩具よりも子どもに創造する楽しさを通じて生きる喜びを与える結果につながっていくのではないか。土粘土は子ども達に適した教材であると保育者自身も知り、感じられたのではないか。ぜひ保育に生かしてほしい。

2. 土粘土をつかっての造形表現を身体表現と融合させたことで

二つを融合させたことで、表現しやすかったという意見が以下の通りであった。

- 身体を動かすことと、可塑性のある粘土を身体・力・空間・時間を感じて楽しく動けた。
- 粘土と身体の動きをからみ合わせたことで自分の気持ちに、より素直になれた。
- 粘土の動きの様に身体全体を使って表現することは粘土という媒体を通して自分を表現しているようである。
- 粘土と共に動くことによって、今まで考えもつかなかった動き方や、少し照れ臭くて出来なかった動き方等も自然と出来るようになった。粘土を通し自分の中のものを呼びだし、見つけられたと思う。
- 手、体、足だけで表現するのではなく、心から動くということは、こういうことなのか、と感じた。
- ドタバタと活動するのではなく、心から肌を通して汗が出てきた。
- 無心で粘土の動きをおいかけて、身体を動かす、おもしろさ、他の人の動きを見ての楽しさ、おもしろい粘土の遊び方をもう一つマスターしたように思う。
- 粘土を通して自分の気持ちが、素直に出せた。不格好でも下手くそでも気持ちが伝わる、楽しい気持ちが。
- 粘土は見た目は重々しい印象を受けるものが、色々な形に変化しそれを身体で表わすことの難しさがわかったが普段あまりない動きで、実際自分の中でイメージしながら動くと、とても気持ちの良いものだと感じた。

- 身体表現という言葉から、いつも私は“どうしよう” “やらなくちゃ” と思っただけが、先走ってしまう事が多いが粘土を通して行うこと、こんなに楽に出来るのだと新たな発見をした。
- 今、現在の気持ちを表わすにはとても良い素材だった。自分で色々な気持ちが入り乱れ、それがフワッーと外に出ていくような気分になった。気が付くと自分で必死になってやっていた。改めて表現力をあらゆる場面で生かしていくには「一つの物」として何かをとらえるのではなく、一つの物を何通りにも考え、とらえていくと良いのではないかと思った。
- 粘土の変化を見て動くのは表現しやすい所もあるが難しい所もあった。身体表現のいろいろな方法を改めて実感した。
- さまざまな動きができることを思い知る。粘土は動かないものという先入観がとり去られた。重いながらも、しなやかな動きができるのが楽しい。
- 物を媒介しての動きは子どもの感覚を率直表現させられるものだと感じた。
- 普段、そんな動きをしないのに、粘土という化け物に操られてしまったという感じがした。
- 初めは照れ臭く周りの様子を見ながら動いていたが、その内粘土と自分だけに集中でき、思いつくままに表現できた。だんだんと気持ち良く動けおもしろかった。
- 粘土をイメージしながら身体で表現するのも最初は少しとまどったが身体を動かしていくうちに、頭も少しずつ、柔らかくなり、自由に表現することができ、とても楽しかった。
- 伸びたり、丸くなったり、ち切れ落ちたりといった粘土ならではの、しなやかな動きが、なかなか難しかったが、動きながら粘土の気持ちが少しは理解できたような気がする。粘土に自分の気持ちを入れて粘土に心を託す喜びを教えられた。
- 初めは粘土を表現するってどんあ風にしたらいいのかなあと思っていたが、気持ちのがのってくると滑らかな動きや速い動き等自然にできた。二人組になった時、相手がどのような形で動くか分からないので動いている内にすごい動

きが出てきたりしたので楽しませてもらった。

- 粘土の感じになって動くのが難しいが、おもしろいと思った。
- 粘土をさわるうちに、気持ちも同じように柔らかく伸びたり、どんな形にも思うままに表現できた。
- 粘土を使ってそれを見ながら身体で表現することは初めて体験した。規則もなくのびのびと表現できて楽しかった。
- 曲線や直線の表現がこんなに難しいものと思わなかった。軽い、思いの区別も難しかった。スムーズに動けなかったのは身体が固いのではなく、頭が固い事を実感させられた。他の人の色々な感じ方、表現の仕方がとても参考になった。粘土であえて、人間の形にこだわらなくても丸めるだけでも表現できることを知った。粘土の形を見て身体を動かすのはかなりハードでしたが、こういうことも出来るのだと楽しむことが出来た。
- 身体を粘土と連動させて、いろいろ動くことはとても想像力があるし、いろいろ動いて疲れたが、普段では考えられない表現だったのでとても新鮮で楽しいものだった。自由に動くことは難しいが頭もつかえてよかった。粘土と身体表現と組み合わせて、他の方の表現もとても素晴らしくみることが出来た。これから、表現力や自分の感性をもっと磨いていかなければと痛感した。

以上が受講者の方々の意見や感想であった。これらのことから、実際に受講者自身こねた土の形をまねたり、粘土の形の変化に動きをつけてみたり、さわってみた感触を身体表現したりするのは、動物や乗物になって身体表現するよりも動きのモチーフも多く素直に表現できたのではないかと考える。なぜなら、実際に自分で体験した素材だから、よりそのものを見て、肌で感じて、臭いもかいで納得したからである。視覚、触覚、臭覚と人それぞれ感じ方は違ったであろうが、それぞれの感覚で創造性を育てながら表現活動へ入っていったのではないか。受講者の方々も素直な気持ちで知らず知らずの内に表現活動へと没頭できたと感じている。粘土の造形表現から身体表現へつなげていく楽しさ、おもしろさがこの実践で理解していただけたのがこの講座の成果であった。感じたものをそのまま自分なりに表現すればよいのであって、他の人と同じ表現

方法でなくてもよいのである。保育の場面でもこのことが生かされ、子ども達一人一人が感じる心を大切に育ててほしい。

IV 考察まとめ

この講座全体についてまとめていくと、まず、この講座全体を通して自由記述で感想を書いてもらったものから考察していく。以下がその文面である。

- この感覚、感性を子どもとの保育に生かせるような自由な自分でありたい。
- 是非、園でも取り入れてみたいと考える。
- 粘土の特性を生かした遊びとして保育の中で取り入れられそうな気がした。是非明日にもやってみようと思った。きっと子どもがおもしろい表現をしてくれそうである。
- 子どもにも表現させてみたい。
- 自分の視野を広め、色々な角度から保育を考えることが出来たらと思い、この講座に参加させていただいた。色々な先生方と出会い、お話を聞いている内に少しずつであるが、自分の保育を見つめ直すことができたように思う。
- 皆さんの作品を見せて頂いたり思いを聞かせて頂いて、自分の思いも高めることができた。人の作ったものを見るのも楽しい。これからの保育の中で保育者自身もこういう時間を持つことが大切である。きっと子ども達の粘土造形表現に対してもやさしいイメージでふれあえると思う。
- 粘土の見方が変化し、概念でものを考えている自分に気づかされた。以後子どもをもっと自由に見てやりたい。
- まず自分がやってみることで、子どもの制作への見方が変わってくるように思う。
- 今、保育の壁にぶち当たったので今日参加してみて、今までの考えとは違った保育のとらえ方が出来そうな気がしてリフレッシュできた。
- 子ども達が粘土の感触を楽しんでいる様子や気持ちがとても良く理解できた。頭でそうなんだと、思い込んでいるばかりではいけないと改めて感じた。
- 今年の保育のねらいが「表現」だったのですが、どうすればいいのか、どう

展開した方がよいのか、なかなか与えられず困っていたのだが、今日は実践を通して身体で感じることができ良かったと思った。

- 苦手なものも自分が楽しいと思えば、スムーズにそして苦手でなくなると感じた。
- 粘土をこねることでストレスがなくなるのではないか。現代社会のストレスを色々とかかえる子ども達には是非とも必要な遊びだと思う。保育に生かしたい。
- 粘土で表現することはどんな風なのか、と思っていたが気持ちのがのってくと自然に色々な動きが出せ、これを保育に役立てたらいいと思った。
- 実際にこれを子ども達に、というのは難しいかも知れないが何かの参考には必ずなると思う。
- 子ども達にもこの経験をできるだけ多くさせてやりたいと常日頃思っているが、どのように取り入れたらいいか悩むことがある。
- 自分の表現を見てまさに、自分の性格や思いが出ていると感じた。
- 頭も身体も刺激を受けて、リフレッシュした気分、力いっぱい背伸びしたくなった。
- アッという間に時間がたった。体も心も頭もほぐれました。
- とても伸び伸びと動け、地に足がついた感じがした。
- リフレッシュで幸せな気分になった。知らない方ばかりの中で自分を表現できたことがうれしい。大胆にもなれた。
- 初めは粘土と聞いて、嫌だなあ（粘土が下手なので）と思ったが表現してみるととても面白かった。
- 土粘土は臭いもなく、柔らかな感触は誰にも抵抗なく遊べるように思った。何よりもやりなおしがきくということの安心感は、“ホッ”とするものがある。楽しく遊べた。
- 素材（粘土）をいつもと違う使い方で考えさせられた。
- 改めて粘土の良さを感じさせられた。
- 何かを作らなくてはいけないと考えることにより、楽しみながら何かが出来

るのが良いと思った。

- 土粘土が子どもにとって、いいことは良く分かっているが、管理を考えるとつい油粘土を使うようになってしまう。手での感触は大人の私達も楽しんで、いつまでもさわっているので、子どもにとって素晴らしい素材であることを改めて感じた。
- 何をやるのかなあ、という期待と不安で気持ちも体も頭もガチガチだった。粘土の重い塊のような感じだった。体を動かすことで少しほぐれ、講師の先生方の自由な独特の人間性にも興味を感じ吸いこまれていった。いつも同じ方向から粘土とか物事を見ている自分を見た。色々な角度から伸び伸び表現する楽しさを味あわせてもらった気がした。おかげでリフレッシュできた。
- もっと、ディスカッションや、他の方々と色々コミュニケーションをとる時間がほしかった。

以上が主な感想であった。この実践経験を生かして次の保育へなんらかの形でつなげていきたい。自分を見つめなおすことができ自分が変わった。子ども達に対する見方も変わった。等の感想が述べられてあった。楽しく表現しながら自分自身を見つめなおし、自分を知っていただけたことは良い機会であったのではないかと思われる。このことにより子ども達に対する見方がもっと柔軟に接することができ、これを保育に生かしていただければ幸いである。保育者が変わらなくては子どもも変わらない。保育者の子どもを見る視野をもっと広く持ち、造形表現を子ども達がする時も、何か物を作らなくってはいけないと考えるより、楽しみながら、何かができる。ということが大切である。

この講座全体についてまとめてみると、

- 1 今回は土粘土による造形表現と身体表現を融合させたことにより、可塑性がある、土粘土の特性が、より一層、色々な動きを生みだし、それが身体表現へとつながった。二つを融合させたことにより表現の可能性が広がった。
- 2 粘土は何か物を作りださなくてはならないという概念を取り除くことで物事の見方が広く解釈できるようになった。
- 3 この実践講座を受けたことで、子どもに対する視点が変わり、子どもを広い

視野で見ることができる。保育の視点が変わっていくのではないか。

4 自分を見つめなおし、自己発見もあり、自由に粘土という媒体を通して自己表現をすることができている。

以上4点がまとめとして考えられるが、保育者という人的環境が子ども達の発育、発達に大きく影響を与える。保育者が広い視野で子ども達を受け入れることができれば、子どもも伸び伸びと活動でき、物事に主体的にかかわろうとする心が育つのではないか。この実践で楽しみながら自分自身の事、子どもの事、そして保育の事を考え、何かをつかみとり感じていたかだければ幸いであり、これが即運動会に、日常の保育に役立つというものではない。ここから感じたものが次の保育へのステップとなればありがたい。

おわりに

粘土を通しての造形表現から身体表現へともっていくのは頭では難しく考えられていたが、やってみると、そうでもなかったのではないか。言葉表現を越えた身体表現のおもしろさを保育者自身も体験して、自己表現を豊かにしていき子どもと共にその喜びを味わってほしい。あまりに感激した出来事や恐怖心は言葉にならず、言葉より先に身体が動いてしまう事を日常の生活の中で経験する。言葉表現が不十分な幼い子どもはより一層、身体全体で表現し訴えてくる。

身体表現に限らず表現活動は子どもにとって、自己を認めてもらう自己確立である。子ども達の生活の大半は表現活動である。様々な表現活動を通して、周囲の世界を観察したり、模倣しつつ関わったりしながら他者を理解していくことで世界が広がっていく。表現活動の過程は幼児の成長過程である。

子どもに限らず表現は人間の命の輝きである。人間が社会生活する上で、表現活動は不可欠のものであり、人間は本能的に自分の存在を他者に知らせ、他者との交わりを結び、内面を表出したいという本能がある。自分が体験したり、思索したり、感動したことを何とかして人に伝えたい、認めてほしいと思う。その伝達方法が各々の経験や体験、年令等の違いがあり、力量によって異なる。

まず、その手段としては日常生活の中では言語表現が使われている。その他、文章表現、身体表現、音楽表現、絵画表現等があるが、表現活動は色々な要素が含まれる複合した総合的な活動である。

機会あるごとにこれらの表現方法を習熟し、豊かで味わいのある深い表現が自分のものとして身に付けることは、生きがいにもつながる。これは幼児期だけの問題ではなく、生涯学習の課題である。

今回の実践講座も粘土で素晴らしい作品を作ったり、身体表現をより芸術的なダンスに仕上げるのではなく、粘土の感触を通じて心が動き、その心の動きが身体を動かし表現へともっていく。自分が感じた事を素直に表現していくのが目的であったので、その点においては講座終了の段階で受講生の皆さんに、このことが理解していただけたことは幸いであった。

今後もこのような感性を磨ける研究会を持ちたいと考えている。

参考文献

- 「身体表現」～からだ・感じて・生きる～
柴 真理子 著
東京書籍
1993年4月
- 「あたらしい表現遊び」
小谷 隆真 著
すずき出版
1996年2月
- 「表現を引きだす 手作り教材の作り方・演じ方」
高橋 系吾 著
ひかりのくに
1997年5月
- 「カニングハム 動き・リズム・空間」
ジャックリーヌ・レッシュェーフ 著
石井洋二郎 訳
新書館
1987年8月
- 「広がる表現活動」
栗原 泰子, 小林由利子, 角尾 和子, 平山 許江 編者
ひかりのくに
1992年6月